２０１８（平成 30）年度
新東名高速道路建設に伴う発掘調査

とかわす　わまるいせき
戸川諏訪丸遺跡

主催　公益財団法人かながわ考古学財団
共催　秦野市教育委員会

縄文時代後期の陥（おと）し穴（あな）群を発見！

戸川諏訪丸遺跡の調査は、新東名高速道路建設事業に伴う発掘により平成 28 年度より実施しています。

今回の調査で発見された陥し穴状遺構（以下陥し穴）は日本列島内で出現した独自の遺構であり、ＡＴ降灰以前の 3 万年前以上に遡ります。静岡県愛鷹山麓遺跡群、横須賀市打木原遺跡・船久保遺跡など太平洋を望む一帯に分布の中心があります。その後の寒冷化に伴い、この土坑形態は影を潜めますが、縄文時代草創期の南西諸島・九州島をはじめ縄文時代早期から後期に列島内各地に地域的形態の特徴を見せながら、弥生時代、中世、近世、現代に至るまで脈々と継続します。

今回見学会を開催する戸川諏訪丸遺跡では、陥し穴が 100 基発見されました。遺構確認面が縄文時代後期の堆積土層であること、14 基の陥し穴の埋没土から 4,000 年前の堀之内式土器の胴部破片が出土したことから縄文時代後期に作り始められたものと推定されます、内 1 基だけですが、2,500 年前の弥生時代前期の土器片 1 点が出土しています。

遺跡は、西側の水無川左岸に隣接する同時期の稲荷木遺跡の敷石住居集落とは異なり、狩猟の一環であるワナ猟の陥し穴猟、集石による屋外調理など、シカ・イノシシなどの狩りとキャンプの場と推定されます。

遺構は弥生時代の黄褐色スコリア層が最上層に堆積していることから、1,000 年以上かけて埋没したこととなり、深さ 2 mとして年間 1 ㎜ の堆積換算となります。

陥し穴の内部や底部からは大形の礫が出土し、偽装時の重し、あるいは仕留めるため大形飛礫の可能性があります。掘り込み面には伐採用の礫器が散見し、人頭大の礫を配置するなど、陥し穴猟の用意周到な計画性が伺われるのです。仕留めた獲物はその場で解体処理するか集落まで運搬するかは、獲物の大きさや種類、猟期によって異なるでしょう。

さあ、出かけよう諏訪丸の猟場へ。

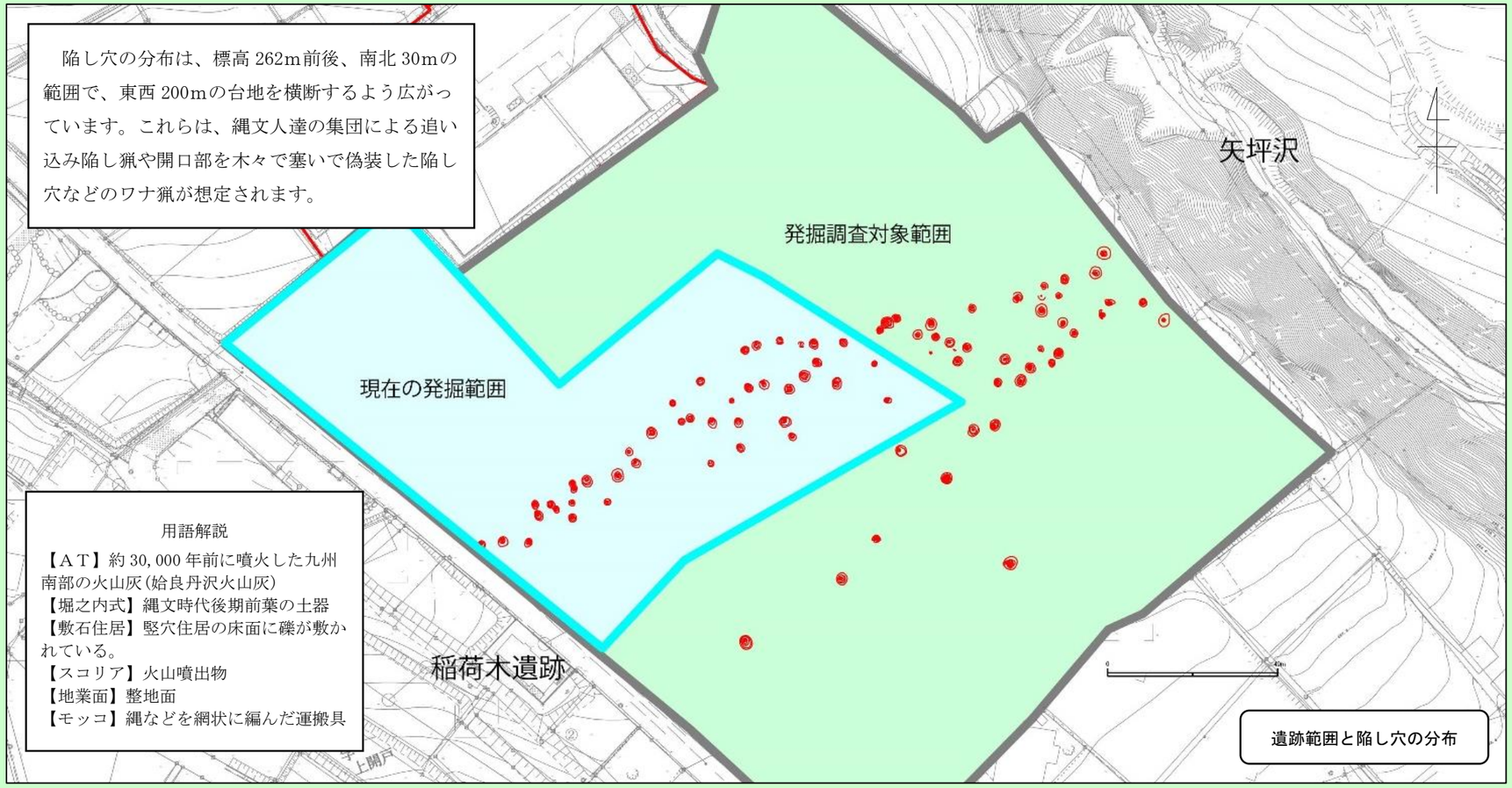
公益財団法人かながわ考古学財団

戸川諏訪丸遺跡　空中写真（東から）

丹沢山地裾部の標高 270mの台地上にあります。東側は矢坪沢、西側は水無川に挟まれた南側に向かった緩斜面に遺構や遺物が広がっています。

陥し穴　空中写真（東から）

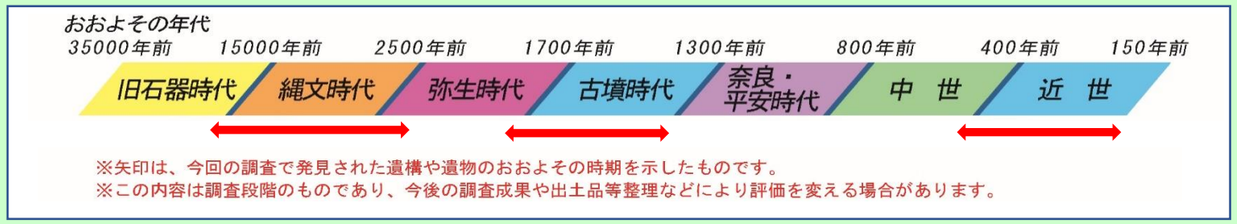
緩斜面の台地を横断して一定の標高に陥し穴は作られています。

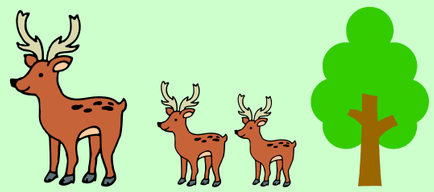


陥し穴の分布は、標高 262m前後、南北 30mの範囲で、東西 200mの台地を横断するよう広がっています。これらは、縄文人達の集団による追い込み陥し猟や開口部を木々で塞いで偽装した陥し穴などのワナ猟が想定されます。

用語解説
【ＡＴ】約 30,000 年前に噴火した九州南部の火山灰（姶良丹沢火山灰）
【堀之内式】縄文時代後期前葉の土器
【敷石住居】竪穴住居の床面に礫が敷かれている。
【スコリア】火山噴出物
【地業面】整地面
【モッコ】縄などを網状に編んだ運搬具

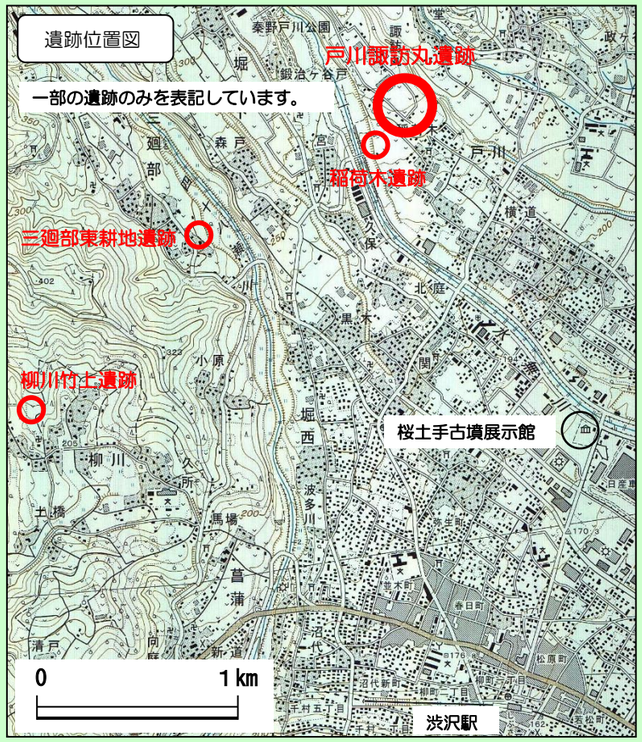
遺跡範囲と陥し穴の分布





陥し穴配列状況（北から）

「地域の特色のある
埋蔵文化財活用事業」



ＪＤ７１５

ＪＤ７２４

ＪＤ８１２

ＪＤ８１３

ＪＤ８２３

排水状況

陥し穴は平面形が円形や楕円形で、断面形は漏斗（ろうと）状となります。開口部の大きさは長径1～3m、深さ1.5～2.7m、底部は0.5～1mを測り、底面には周囲あるいは中央部に杭穴が穿たれます。また、陥し穴の埋没過程の観察から、隣接する陥し穴の埋め戻し、埋没過程での地業面の構築などを行っています。棒や骨角器、打製石斧などの着柄した石器で地面を掘り込んでいます。壁面ではこれら掘り道具の掘削痕跡は検出できませんが、表面を滑らかにして獲物の足がかりを排除した可能性もあります。また、ほとんどの陥し穴の底部は硬いローム層上面にとどまり、底部から逆茂木(サカモギ)などの杭を打ち込んで、落下したターゲットに絡めるか、容易に這い上がれないような工夫をしています。陥し穴の掘削と排土搬出もハシゴや大縄、モッコの利用が考えられます。掘削した土の量は1基あたり2㎥から10㎥、全体で500㎥にも達し、掘り返した土は周囲に敷き均すか矢坪沢へ廃棄するなど大掛かりな共同作業の結果なのです。

2018(平成30)年度
新東名高速道路建設に伴う発掘調査

戸川諏訪丸遺跡見学会資料

2018年4月21日
主催　(公財)かながわ考古学財団
共催　秦野市教育委員会

〒232-0033　横浜市南区中村町3-191-1
℡045-252-8689　http://www.kaf.or.jp